

第4回 2025年政府出展事業検討会議

■日時：2023年1月18日(水) 16:00~18:00

■参加者

池坊 専好氏、古賀 信行氏、コチュ・オヤ氏、佐藤 オオキ氏、塩瀬 隆之氏、千 宗室氏、鳥井 信吾氏、米良 はるか氏

■議事要旨

●事務局より、資料3に基づいて、日本政府出展事業の検討状況について説明した後、有識者から意見を頂戴した。各有識者からの主な意見は以下の通り。

【建築】

- ・建築のデザインについては、シンプルかつ球体で膨らみがあると感じた。
- ・資材の再利用ひとつをとっても、学校や公園等の身近なところにも活用することで万博の痕跡を残し、日常の中で感じられるようにすれば、レガシーの一部として印象づけられるのではないか。
- ・日本は新しい事へ取り組む際、試しに一部だけ導入してみるという形式が多いが、例えばトイレなど、「性別関係なく使える共用仕様のもの」を追加設置するのではなく、「共用仕様のもの」のみの設置とする、つまり全てが共用（ジェンダーレス）など思い切った対応をすると、新しい日本を印象づけられるのではないか。
- ・基本構想において、真ん中に象徴的なものを置くとそこが中心になってしまうことから、中心には物を置かずその周りをぐるぐる回っているという考え方があった。中心を中空にすることで、日本らしさを建築のコンセプトにも落とし込んでいただいていると思う。

【展示】

- ・朽ちていくことが決してマイナスではなく、それがプラスにもなり得る美というのが日本的な考え方を反映していると感じる。
- ・日本の花の素晴らしさは、国際的にも競争力のある分野。その一方で、規格外や盛りを過ぎたという理由で廃棄される花があり、これを活用出来たら良い。捨てられてしまう物に光を当てる、いのちや物を大切にする精神が伝わるのではないか。
- ・日本館で伝えたいことの中で、「人はいのちの一部である」という内包感や哲学があり、そこが明確に伝わって欲しい。
- ・とっつきやすさやわくわく感も伝えられるとよい。
- ・人の特性として、その場所を実際に訪問し、物に触れた時に記憶に残る。手に取って体感できる製品の形に落とし込み、お土産として持ち帰れるような工夫ができるとよい。

・展示の公募プロセスにおいて、要件を具体的に提示し、企業側が参画の余地を認識できるようにするべき。その際、わかりやすい形で公募プロセスを進めていくことも重要。

・コンセプトを具体化する際、例えば、「音」という要素を活用する等の工夫を凝らし、日本を五感で感じさせる仕様としてはどうか。

・日本館を出た後に頭に残る wow factor があるとよい。

・自分も循環の一部であり、自分の行動がどう影響を与えていくのかを考えさせるような展示体験もあって良い。

・外国人来訪者の視点で考えると、日本でしかできない体験や日本ならではのデザインが盛り込まれるとよい。

・展示を考えるにあたっては、人間本位ではなく、一見したところでは役に立たないもの、ただそこにあるだけのものもあって良いのではないか。

・万博チルドレンをはじめ次世代に託す想いが、来場者同士のつながりとしてお互いに目に見えるような仕掛けとなるとよい。

・見せたい綺麗な部分だけを用意するのではなく、本来バックヤードで行うメンテナンスの部分といった実態の姿を見せることは、人が循環の一部である事を表現する示唆に繋がるかもしれない。

【広報・バーチャル】

・バーチャルでリアルを全て代替できてしまう仕様だと、万博会場を実際に訪問する意欲が欠けてしまう。バーチャルで代替体験ができて、その上で本物の会場に行ったら、何らかの成果物を獲得できるなど、「貴重な体験」だと感じさせるプラスの要素が必要。

・バーチャル日本館は、ただ会場にカメラを置いて VR ゴーグルで見せる、という形だと中途半端であり、リデザインが必要。何か wow factor を作って、アピールできたらいいのではないか。

・日本館そのものから出てくるストーリーが、一部でも具体的に持ち帰れるような形で見られるようになっていると良い。

・何かを感じたり、理解するための情報をどう絞り込むかが肝心。更に、そこでデジタルをどう活用するか。

・会期は 184 日もあるので、この中で、日本館においても、デジタル、オンライン、リアルも駆使したワークショップやサロンを毎日どこかでやって頂きたい。

【若年層への訴求】

・一見したところでは難解なコンセプトやメッセージを、次の世代の人が思い出したときにターニングポイントになると良い。どのような形で若い世代が消化し、どう感じて、日本の未来をどうイメージするのか、こうしたことを考える契機になるとよい。

【運営】

・「日本らしさ、日本らしい表現」とは目に見える形とともに、おもてなしや気遣い、優しさといった心の部分。テクノロジーを活用すればする程、その場のスタッフ、人との支えあいが補完として重要になってくる。スタッフの教育がしっかりされるべき。